

エドワード六世時代におけるイタリアとの邂逅*

富田 爽子

English Encounter with Italy in the Age of Edward VI

Soko TOMITA

要 旨

エリザベス朝のイタリア積極受容は英文学に大きな影響を与えた。本論はそれ以前のエドワード六世時代に、イタリア本が28版も出版されていたことを示す。今まで考えられていた以上にイタリアの影響があった。その最大の特徴は、プロテスタンティズムとの強い結びつきである。エリザベス朝以前に無意識及び意識的受容があったことは、この時代がイタリア文化と無関係ではなかった証明だ。これらはエリザベス朝の、より明確な意識的受容の下地となった。そして、この時代に出版されたジョン・ポーネットの『カテキズム』のイタリア語版は、意識的発信であった。

この時代の英国のエネルギーは、イタリア要素の無意識的受容を助けつつプロテスタント振興という形で国内に向けられていた。そのエネルギーが自我の目覚めと結びつき、プロテスタンティズムを急速に成熟させた。その成熟を外部へ発信したのがこの1冊である。これは後進国英国の自己主張である。その矛先が、ルネサンスの花開いたイタリアであったことは着目に値する。国民レヴェルでは無意識的受容が大勢を占めており、一見、無意識にイタリア要素を吸収していたのみに見える。しかしイタリア語の『カテキズモ』の存在は、英国がイタリアを交流の相手とし、自らの意志でイタリアに接近しようとしていたことを示す。イタリアへの発信の書はたった1冊であるが、英国が既にイタリアに関心を持っていた貴重な証拠である。

キーワード：エドワード六世，イタリア，出版，プロテスタンティズム，カテキズム

1. はじめに

エリザベス一世時代の文学の大きな特徴に、多様性や人間性の探求がある。エリザベスの社会にはイタリア文化の影響が色濃く反映しており、その例は枚挙にいとまがない。劇作家は一様にイタリアの文化や生活についての洞察を作品にちりばめた。一方でエリザベスより前、メアリー一世やエドワード六世時代（以降エドワード時代と記載）にお

けるイタリアの影響はあまり注目されておらず、理解されていない。エリザベス時代のイタリア文化への傾倒は、この時代のみで培われたものだったのであろうか。エドワード時代は英国ルネサンスの土台となった時期であったと考える。エドワード時代における英国のイタリア文化とのかかわりを考える上で着目すべき1冊がある。それはジョン・ポーネットが編纂した『カテキズム』のイタリア語翻訳である。

本論執筆に際しては、STC, ESTC, USTC等を基にしている⁽¹⁾。これらは本研究分野においては一般的な資料であり、本論文においても、これらに基づいて調査・考察を行った。また考察においては、これらの資料がそうであるように、現存する書物のみを対象としている。

2. エドワード六世時代の出版物

ヘンリー八世は英国をローマのカトリック国際組織から切り離れたばかりでなく、大陸のプロテスタントの世界とも一線を画していた。しかしエドワードが9歳で即位した時、新体制はその宗教政策を著しく開放的にした。わずか6年半の治世であったが、エドワードが熱心なプロテスタントであったことが、時代をはっきりと特徴づける。大陸ではトリエント公会議によりカトリック教会の改革が進む中、英国では信仰のみによって立ち、聖体にキリストの真の存在を主張するプロテスタント寄りの礼拝様式が確立された。さらに工業・農業・貿易などが発展し、社会が大きく変化した時代だった。中世的な諸関係が次々と破壊されていく中、エドワード時代の前半は、王の伯父初代サマセット公爵エドワード・シーモアが摂政として政治を行う。サマセットはプロテスタントの典礼と祈祷書の作成に心を砕いた。一方でカトリックには厳しい態度で臨み、パンフレット作者でロンドン司教のエドモンド・ボナーやウィンチェスター司教スティーヴン・ガーディナーを投獄した。後半は初代ノーサンバーランド公爵ジョン・ダドリーが中心となって、礼拝統一法、42箇条の作成など、さらに積極的なプロテスタント政策を行ない、福音主義系の出版に対し明確な支援を行う。つまりエドワード時代を通して、英国はプロテスタントを振興したのだ。英国の宗教改革は大陸とは異なり、国王主導型、すなわち「上からの」の改革であった。

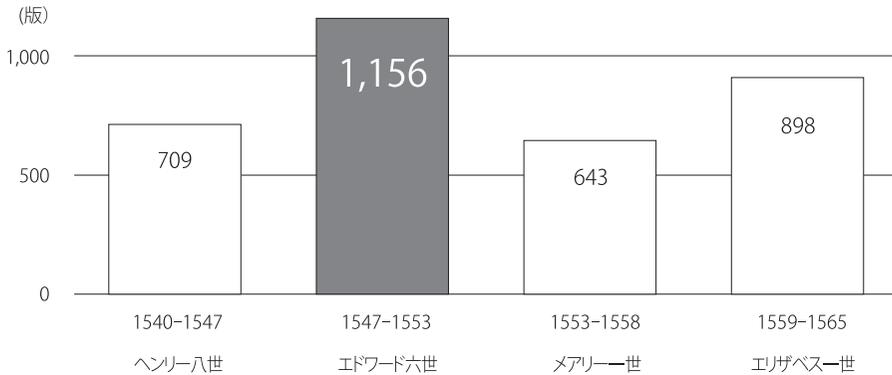


図1 時代別 出版数

図1は、ヘンリー八世からエリザベス一世までの、それぞれ7年間の出版数を表したグラフである⁽²⁾。出版に後れを取っていた英国では、大陸の出版社が多くロンドンに支店を構えており、パリ、アントワープといった主要な印刷拠点で生産した本を、十分に供給していた。ヘンリー八世時代は英語の書物も多くを大陸に頼る状態が続いていたのである。エドワードの治世になって、政府が印刷というメディアをフルに活用したため、印刷技術が急速に発展した。このことが、大きな社会的・宗教的・文化的変化をもたらした。この時代には1,156版もの書物が出版された。エリザベス時代の総出版数が少なくとも9,404版以上あることを考えると、とるに足らないほど少なく見えるが、エリザベス時代の最初の7年間に区切ると、むしろエドワード時代の出版数の方が多い。

16世紀初頭までに、書物は1回の印刷で1,000～1,500部ほど生産されていた。当時のイングランドとウェールズの人口が合わせて300万人だったことから判断すると⁽³⁾、1,156版という数は、貴族や知識階級だけでは、到底消費しきれない数だ。読者として裕福な中流の上位に位置する商人を思い出す必要がある。ライトによると、中流階級は13世紀頃からゆっくりと力を蓄えており、英国は中流階級の台頭に国を変革していく力を感じていた⁽⁴⁾。修正主義の立場からトニーも、中世的慣習が次々と破壊されていく中で、勃興してきたジェントリの中核に専門職や富裕な商人を含めている⁽⁵⁾。クレシーはダラム、エクセター、ノリッジにおける文盲率の推移を階級別にグラフで表した⁽⁶⁾。地域や階層により異なるが、彼のグラフから、1550年頃のヨーマンや商人の識字率は既に25%～45%に達していたことが分かる。

教育が商業の繁栄に繋がるとし、裕福な商人はヘンリー八世の頃から子弟を大学や法学院に送り込んでいた⁽⁷⁾。また15世紀頃からグラマースクール等も設立していた⁽⁸⁾。中流階級が本格的に知的な目覚めを迎えるのはエリザベス時代を待たねばならないが、エリザベス時代で活躍する作家の父親の多くは、中流階級であった⁽⁹⁾。さらに商業の発

達に伴い、読み・書き・計算が、奉公人にも望まれるようになり、書物の需要も加速する。新たな消費者として、字の読める中流階級の下位層が加わった。

庶民向けとして、プロテスタントのパンフレットの洪水が起こった。宮廷人や大学の知識人向け、また政府刊行物や教会専用とされていた書物とは、外観も内容も異なり、ページ数が少なく、易しい英語で書かれた廉価版が巷にあふれた。書物が身近な存在になったのだ。それまでは教会で説教を聴くだけだった人々が、自分で書物を読んで、聖書や信仰について考えるようになった⁽¹⁰⁾。学校の普及などによる識字率の向上に応じて、書物が供給された。印刷出版の急速な普及は、国民の新しい宗教や情報の吸収を促進することになる。本の世俗化が進んだ。

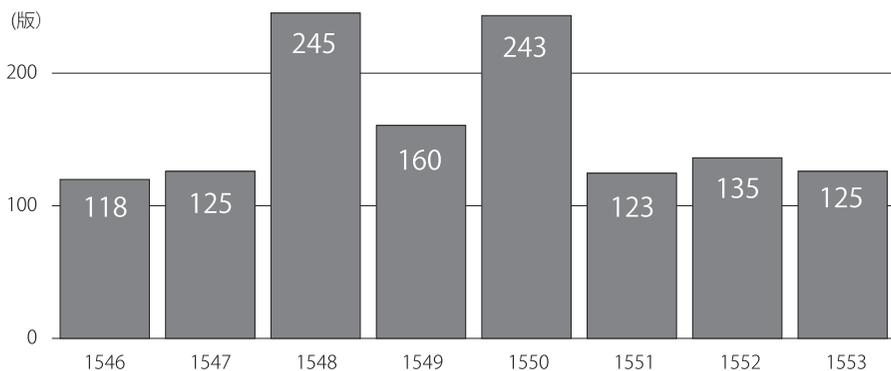


図2 年代別 出版数 (1546-1553)

図2は1546年とエドワード時代の出版数を年代別に表したグラフである。特に出版数の多かった1548年は、前年にそれまでの出版統制が撤廃され、新政策が実施された影響を示している。また1550年は同じく前年に、プロテスタント弾圧を逃れて大量の亡命者が大陸からやってきた影響の反映と考える。それに伴い外国文化が流入し、一般国民の外国に対する認知の促進に繋がった。亡命者の多くはロンドンの外国人教会に身を寄せた。中には印刷業者も多くおり、印刷技術の向上と出版数の増大に貢献したのである⁽¹¹⁾。

大陸からの輸入に依存していた印刷業界は、リチャード・グラフトンやジョン・デイ、ウォルター・リン、エドワード・ホイットチャーチといった大物印刷業者が現れ、国内の印刷・出版は発展していく。彼らは政権と結びつき、政府の意図を反映して市場を独占するようになった。ロンドンの外国人人口が時代初頭には5,000~6,000人にまで膨れ上がったことも、人々に異文化に接する機会を与えていた⁽¹²⁾。

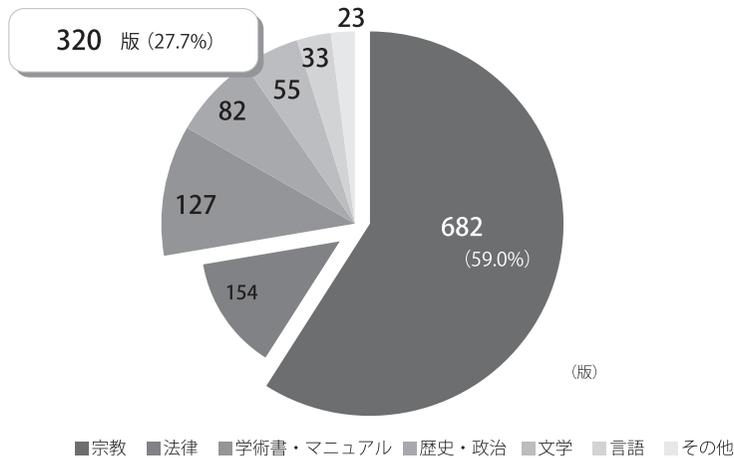


図3 ジャンル別 出版数 (1547-1553)

図3のジャンル別出版数を見ると、大きく2つの特徴が見て取れる。ひとつは、全体の59.0%を占める宗教書の出版だ。この時代の出版の最大の特徴であり、後述の着目すべき一冊の重要な背景となる部分である。

莫大な量の宗教書は偶発的なものではなく、政府が特許や支援を与えて、広く中流階級の下位層にプロテスタントの教義を広めようとした意図的なキャンペーンの成果なのだ。プロテスタンティズムが社会に大きく影響を与えた時代と言える。682版の宗教書は、判明しているだけで、150名の著者、そして少なくとも88名の翻訳者による。つまり、宗教書は一部の限られた人々によって生み出されたのではなく、多くの文人が関わっていたのだ。682版の宗教書のうち3版のみがカトリック、そして残りの679版がプロテスタントの書物であった。プロテスタンティズムが時代の原動力だったのだ。

政府の強烈なプロテスタント振興政策は、必ずしも国民全般に浸透したのではないという議論がある⁽¹³⁾。この時代、プロテスタント本の出版数は激増し、カトリック本は激減した。政府の寛大政策はプロテスタントの書物に限られ、カトリックに対しては厳しい弾圧が行われた。国内で出版されたカトリックの書物はオックスフォード大学の神学欽定教授リチャード・スミスによる2冊(STC 22818, 22823)と、パンフレット作者マイルズ・ホーガースによる1冊だけである(STC 13560)⁽¹⁴⁾。ガーディナーは、サマセット公爵のプロテスタント政策に抗議したため投獄され、著書はこの時代に国内で出版されることはなかった(STC 11592)。

しかし、プロテスタント本の増加は実際のカトリック信者の減少とは必ずしも結びつかない。プロテスタント振興が国策であり、「上からの改革」であったため、表面的に体制に服したカトリック信者はいたのだ。「信仰」や「影響」といった事象は、数字だ

けではその全容を測ることはできない。また出版には統計に表れない様々な事情や偶然を伴うことを考慮しなければならない。出版数によって分析を行う際には留意すべきだ。それでもエドワード時代全体を見た時、プロテスタント本のこのように多い出版数と全体に占める割合から、少なくとも国民の身近にプロテスタント本が存在するようになったのは確かと言える。

この時代の出版のもう一つの特徴は、宗教書・法律書以外の知的生産物である。その中には非常に興味深い書物が出版されている。ここで初期の書籍印刷のほとんどが、宗教と法律書だったことを思い出す必要がある。ヘンリー八世時代から既に、学術・歴史・文学・言語といった世俗的な出版が増え、エドワードの治世には27.7%、を占めるまでになっていた。中でも注目すべきは学術書と文学書の出版であろう。

学術書やマニュアルはこの時代で127冊出版されており、その内容は多岐にわたる。特に医学関係の書物は38版にも及び、病気や治療に関する知識が広く一般にも求められていた。また暦や予言、カレンダーなどが30版も出版され、天文学、占星術、農業など、宮廷の外の庶民生活に関わる書物の出版が目につく。エリザベス時代では、宗教書の出版は減少し、これらの世俗的なジャンルが激増する。印刷・出版が発展した結果、人々が宗教・法律書以外の知的生産物に関心を示し、学術や実生活に関わるマニュアルを書物に求めるようになっていたのである。後のエリザベス時代の大きな需要にくらぶべくもないが、これらのジャンルの出版が、この時代すでに総出版物の1/4以上を占めていたことは、書物の社会における役割が変わってきたことを示す。貴族だけでなく、中流上位の人々の知的生産物への関心も窺える。膨大な出版数、世俗的な刊行物から、書物の国民への浸透が見て取れる。

文学書はこの時代55版が出版されている。著者は名前が分かっているだけで28名を数える。文学書の特徴としては、ジェフリー・チョーサー⁽¹⁵⁾、トマス・チャーチャード⁽¹⁶⁾、ウィリアム・ラングランド⁽¹⁷⁾を除いた著者の多くは1版か2版しか出版していない。全集4版がすべてフォーリオの大著というチョーサーは例外で、オクティヴォの文学書が圧倒的に多い。特に注目すべき書物としてはスティーヴン・ミールドマンが印刷したトマス・モア卿の『ユートピア』(STC 18094)、ジョン・スケルトン (STC 22595.5) やトマス・ワイアット卿の詩 (STC 26053.5) や、『百物語』(STC 23664.5) などがある。著者の多くが宮廷と深い繋がりがあり、詩や物語に人気があった。このことから、文学書は学術書やマニュアルより限られた範囲、つまり宮廷やその周辺で愛読されていたことが窺える。出版物をジャンル別に見ると、人々のニーズや時代の流れが見えてくる。書物が社会において果たす役割が、明らかに変わってきているのだ。読者の本に対するニーズの多様化が見える。それが、エドワード時代に起こっていたのである。これは、その後の出版の歴史に大きな意味を持つことになる。

図4はエドワード時代の出版物のサイズ別出版割合を示したものである。

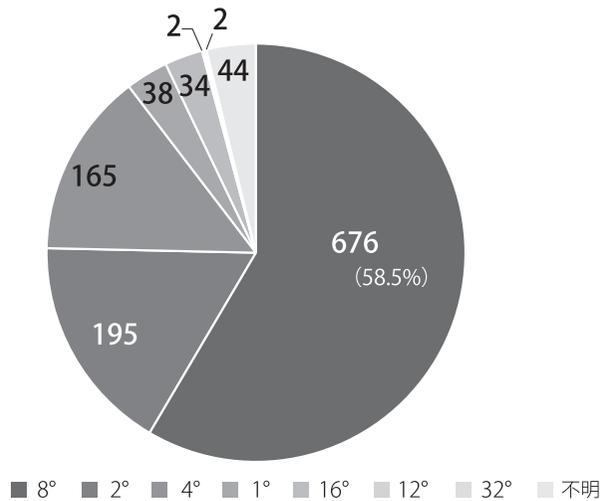


図4 サイズ別 出版数 (1547-1553)

一番多いのはオクテイヴォで、全体の58.5%を占める。サイズによって、著者の地位や、献呈先、また内容や対象とする読者に違いがあるようだ。とはいえ、オクテイヴォの書物が必ずしも全て中流階級向けではなかった。例えばアルドゥス・マヌティウスのオクテイヴォ版は、そもそも大陸で「ルネサンス・ヨーロッパの世俗的な知識人」と呼ばれ、イタリア文化にかぶれた名士たちに人気があった⁽¹⁸⁾。イタリアの宗教改革論者ベルナディーノ・オキーノの説教集のように、オクテイヴォであってもサマセット公爵に献呈されたものもある (STC 18765)。またポリドール・ヴァージルの発明史のように、500ページを超える大著もある (STC 24657)。一概には言えないが、やはり一般の国民にとっては、オクテイヴォの書物はフォーリオよりは手に取りやすい書物であったことは間違いない。本が庶民にとって身近なものになったのだ。これは次の時代における重要な要素となる。

3. イタリアからの書物

パークスはこの時代のイタリア本には6版しか言及せず、数の少なさを強調した⁽¹⁹⁾。しかし今回の調査の結果、イタリア本は28版も出版されていることが明らかになった⁽²⁰⁾。28版というのは決して多い数ではないが、少なくとも一般に考えられていたより、はるかに多い出版数である。

さらに2作品 (STC 2726, 7272)⁽²¹⁾を除き、どのイタリア本のタイトルにもイタリア由来であることがはっきり印字されている。タイトルにはイタリアという文字が記載されているか、明らかにイタリアであることが分かる固有名詞が記されている。つまりイタリア由来であることが、宣伝だった。読者の間にもイタリアへの関心が芽生えていることを、翻訳者も印刷業者も既に時代の中に感じ取っていたのだ。書物の庶民化と同時に、イタリアの英国への浸透の兆しを窺わせる。

ちなみに、イタリア文化の影響が強いと言われているエリザベス時代でも、最初の7年間にはイタリア本は35版しか出版されなかった。しかし、エリザベス時代全体では528版も出版されており⁽²²⁾、やはりイタリアの影響が色濃い時代だったのは間違いない。それではエドワード時代のイタリア本28版から、イタリアの影響について何が言えるのだろうか。

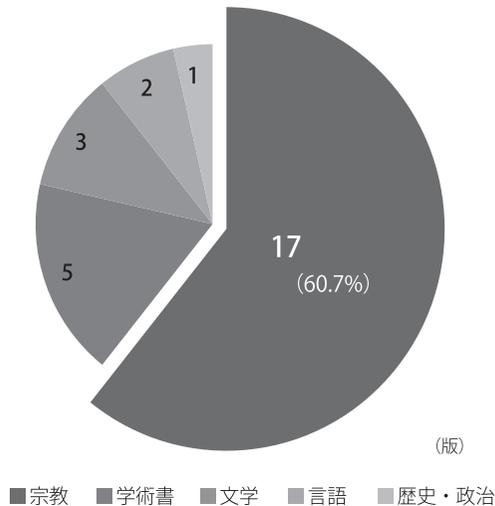


図5 ジャンル別 イタリア本の出版数 (1547-1553)

イタリア本でも宗教書が最も多く出版され、全体の60.7%を占めている。イタリア本においてもプロテスタントの盛り上がりが根本要素であった。そしてイタリア本では、これらの宗教書の全てがプロテスタントの書物だった。時代全体において宗教出版が多いことが、イタリア本の宗教出版を後押ししていたのだ。

特に大司教トマス・克蘭マーの招聘でイタリアから英国にやってきたオキーノの影響は、宮廷で広まった。教育に熱心な貴族アントニー・クック⁽²³⁾を父に持つアン・クック・ベイコンや、ガーディナーの後を継いでウィンチェスター司教に任命されたポーネットの翻訳により、説教集やローマ攻撃の寓意物語を6版も出版し、大きな影響を与え

た⁽²⁴⁾。国策であるプロテスタント振興政策の後押しにより、これらの書物は、宮廷や大学の枠を超えて、多くの人々に届けられたに違いない。

クランマーの招きでオキーノと共に英国に渡ったピーター・マター・ヴェルミーリはオックスフォードで行った、カトリックの神学者との公開討論会で成功をおさめ⁽²⁵⁾、その論争はラテン語と英語で出版された (STC 24673, 24665)。このふたりのプロテスタントイズムへの転向はイタリアに相当な衝撃を与えたが、英国でも、ふたりの著作や活動は国民に大きな影響を与えた。ヴェルミーリは共通祈祷書や教義要綱の定義づけ、また 42 箇条の編纂など、政府のプロテスタント政策に積極的に関与した。この時代にイタリアの宗教書を 2 冊以上出版した著者はふたりをおいて外にいない。このことから、このふたりの影響の大きさが窺える⁽²⁶⁾。

イタリアの宗教書を英訳した人々は、上述のベイコンやポーネットを含め、全員が宮廷と何らかの繋がりがあり、また保護を受けた人々だった⁽²⁷⁾。イタリアの宗教書出版は宮廷を中心に行われたのだ。イタリアの宗教書を印刷した業者は 13 名でそのうち複数印刷したのは、ヒル、ミールドマンとデイのみ。他は 1 版しか印刷していない。しかし各印刷業者の印刷数を比較すると、総じて宗教書の出版割合が高い印刷業者はイタリアに関心を示し、イタリアの宗教書を印刷していることが分かる⁽²⁸⁾。

しかし、宗教書出版の第一目的はプロテスタントイズムの浸透であって、イタリア文化の普及ではなかった。政府の後押しや、時代のうねりに押されて、人々はプロテスタントイズムを理解する人も、しない人も宗教書に手をのぼしたと考える。読者がそれらの書物に含まれる宗教以外のイタリア文化からの影響にも、知らず知らずのうちに感染していたとしても不思議ではない。無意識的なイタリア文化の受容はこの時代の特徴であり、イタリアの影響を積極的に受容する、後のエリザベス社会の風土醸成につながった。

宗教書の次に出版が多かったのは、学術書やマニュアルの類だった。28 冊のうち 5 冊がこのジャンルに該当する。中でも当代一のイタリアの名外科医ジョヴァンニ・ダ・ヴィーゴの医学書は 3 冊も翻訳されて出版されている⁽²⁹⁾。数少ないイタリア本の出版の中でヴィーゴの著書が 3 冊も出版されていることは注目に値する。特にバーソロミュー・トラヘロンの訳した 1550 年版はフォーリオで出版された。専門用語の解説が添えられ、一般読者も対象とされていたようだ。上述の通り医学知識の需要があったと考えられるが、フォーリオ版の出版目的は幅広い読者を想定しているとは言えない⁽³⁰⁾。

イタリアで商法を学んだヤン・インピン・クリストフェルスによる会計学の本は (STC 26093.5)⁽³¹⁾、ルカ・パチョーリの世界で最初に出版された複式簿記の文献から編集⁽³²⁾、イタリア語からオランダ語、フランス語を経て英訳された。原著は大陸で人気のあった大著だが、英訳では 40 葉にまとめられている。時代はこのような実用書を必

要としていたのだ。内容が専門的であり、国王御用達のグラフトンが印刷したことから、本書の読者も限定されていたと考えられる。

もう1冊はイタリアのヒューマニスト、ヴァーギルの発明史である（STC 24657）⁽³³⁾。初版は1546年に出版され（STC 24654）、大変な人気で1560年頃に再版されている（STC 24658）。出版数は少ないものの、イタリア本のこのような先進的、知的著作の出版は時代の傾向と連動しており、英国はイタリアの学術書や実用書に無関心ではなかった。

文学書をみると、宮廷ではダンテ、ペトラルカ、ボッカチオは輸入本で、既によく知られていた⁽³⁴⁾。しかし国内では、彼らの傑作はこの時代1作も出版されていない。16世紀初頭までにイタリアでは、ボイアルドの『恋するオルランド』やアリオストの『狂えるオルランド』のような叙事詩の傑作が出版されていたが、これらが英語で出版されるのは16世紀末のことである。それでもイタリアの文学書が3版も出版されたことは注目に値する。文学書は、宗教書ともまた学術書やマニュアルなどとも異なり、より形而上的なジャンルである。時代全体で見ても、文学書の出版は4.8%にすぎず、エリザベス時代と比べればまだ活発とは言えなかった。出版された3版のうち2作の著者はピッコローニの名で知られるローマ教皇ピウス二世である。ルネサンスを代表する人文学者で、『アレクサンダー・パークレーの牧歌』と題する田園詩がその1冊だ（STC 1384a）⁽³⁵⁾。もう1作はボッカチオ風のロマンス物語で、本作品が英語で出版されたのは特筆に値する（STC 19970）⁽³⁶⁾。著者のエロティックな散文物語をライムロイヤルの弱強5歩格に英訳したもので、イタリアでも非常な人気の作品だった。この2作品は英国人の心に訴える特別なものがあつたに違いない。エリザベス時代でもその人気は続き、後に多く再版され、別の翻訳も出版されることになる。エリザベス時代に花開く、イタリア文学への熱狂的な傾倒の先駆けと言えよう。

出版されたもう1冊は『オテアの書簡』である（STC 7272）⁽³⁷⁾。著者クリスティーヌ・ド・ピザンは、中世のヴェニス出身の詩人、文学者で、フランス文学最初の女性職業文筆家だった。人生の大半をフランスで過ごしたが、父親の教育で、しっかりとイタリア文学の教養を身につけていた。著者が創造したオテアという女神が、トロイア王子ヘクトールのために神話伝説から教訓を引き出し、騎士道精神を養うため助言を与えるという内容である。国を統治する人物を教育しながら、国の将来を案じたこの作品はフランスで大成功をおさめ、英国でも15世紀中に3つもの翻訳が出た。ピッコローニもピザンも、エドワード時代の読者にはダンテより身近な存在であったのかもしれない。

文学書に加えて、この時代ではイタリア語の書物が4版も出版されており⁽³⁸⁾、前後の時代には見られない現象だった⁽³⁹⁾。エドワード時代におけるイタリアへの関心の高

まりを示す一つの兆候だ。特にクレアやトマスの作品、および6カ国語辞書からは、積極的にイタリア語を習得し、イタリア文献を読もうとする読者の姿勢が窺える。これらの宗教書以外のジャンルの書物はイタリアの優秀性を認識した上での意識的受容であり、最先端の知見を印刷本に求めた時代の風潮と一致する。エドワード時代は書物が巷にあふれる中、これらの知的生産物が、本に興味を持ち始めた中流のより広い範囲にまで広がった時代だったのだ。

後進国が先進国の文化を受容する場合には、意識的に受け入れる場合と、無意識に受容する場合とがある。意識的受容とは、エリザベス時代に見られるように、読者がイタリアの先進性を認識し、積極的に取り入れようとする事だ。これに対して無意識的受容とは、書物に浸み込まれているイタリア的なものを、それとは認識せずに吸収しているケースである。「イタリア的なもの」がどういうものであるかを言葉で説明するのは難しいが、あえて言うなら、「イタリア人の持つ性格、あるいはイタリア人の存在自体が醸し出す雰囲気」であろう。当時のイタリア文化の影響を考える時、この「イタリア的なもの」も考察の対象と考える必要がある。そしてエドワード時代においては、この「無意識的受容」が最大の特徴なのである。書物からの無意識的受容と、意識的受容の両方が同時進行で行われ、エリザベス朝の積極的なイタリア文化受容の備えをなしたのだ。それがこの時代の特徴であった。

テューダー朝は、英国の自我の目覚めの時期である。そしてエドワード時代は、その中間に位置する。イタリア文化の無意識的受容は、イタリア文化に浸み込まれた「ルネサンス魂」の無意識的受容だった。それは英国において、自我を認めることや人間性の解放を後押しした。このことが、後のイタリア要素の積極的受容と、それによる英国の自我・自負・自立・自信のさらなる覚醒に影響を及ぼしたと考える。当然ながら、エリザベス時代に花開く文学や演劇の多様性・人間性の探求にも多大な影響を与えた。多くの人々はこの無意識的な受容を、書物を読むという行為の中で経験したのだ。

4. 着目すべき1冊

ところで、イタリア本の中に他とは異なる希少価値を持つ書物が1冊ある。

CATHE
CHISMO, CIOE FOR
*ma breue per amarrare i fanciula
li: La quale di tutta la Christiana disciplina così
tiene la somma: e per l'autorità del serenissimo
Re d'Inghilterra. etc. messa in luce: e con or
dine che tutti i maestri di scuola à disce
poli loro l' insegnino: e in quella
con diligenza amazzino.*

*Tradotta di Latino in lingua
Toscana per M. Michelagnolo
Florio Fiorentino.*



EEBO の画像。クラリバイト社より掲載許可取得済み。
Early English Books Online <<http://eebo.chadwick.com>>

図6 『カテキズム』(STC 4813), A1^r。

それはジョン・ポーネットの『カテキズム』のイタリア語版で、図6はその標題紙である。英国で成熟したプロテスタンティズムの真髄を英国人が編纂し、イタリア人がイタリア語に翻訳、英国在住のイタリア人に向けて出版した書物、つまり英国人がイタリア人に向けて発信した書物である。まだまだ無意識的な受容が多い中で、英国がイタリアに向けて発信を行ったという点で、着目に値する。第一義的にはロンドンにいるイタリア人のために出版されたものだが⁽⁴⁰⁾、1548年のヴェニスでの書物の大量焼却以降⁽⁴¹⁾、プロテスタント書物の出版が出来なくなったイタリア本国のプロテスタントにも向けられていたと考える⁽⁴²⁾。

プロテスタント振興政策は着々と進み、折衷的と批判された共通祈祷書(STC 16267-16277)も1552年には改良され、プロテスタント色を鮮明にした(STC 16279-16290.5)⁽⁴³⁾。ダドリーは教理問答をラテン語と英語で編纂するよう、当時宮廷で最も影響力のある聖職者だったポーネットに委託し、クランマーが作成した信仰箇条、42箇条(STC 10034, 10034.2)⁽⁴⁴⁾を添えて出版させた。国の広い国民層と次世代にプロテスタント教育を徹底し、42箇条を浸透させて、宗教論争における英国国教会の立場を明確にしようとしたのだ。

カテキズムはキリスト教の教理を分かりやすく説明し、洗礼や聖餐といったサクラメ

ントの前に行われる入門教育で用いられる。教理問答が全キリスト教会に普及したのは、言うまでもなく印刷機の発明のおかげだ。ルターが活躍した頃から「書籍の印刷なくして宗教改革なし」とよく言われていた。ルターが教理問答についての本格的論文を書いてから2世紀の間に⁽⁴⁵⁾、英国では1,000種類もの異なる教理問答が出版された⁽⁴⁶⁾。教理問答がいかに重要視されていたかが分かる⁽⁴⁷⁾。プロテスタント信仰の最も重要な柱とされ、図6のタイトルは「子供を教育するための冊子で、キリスト教の全ての教義が掲載されている」と説明している。克蘭マーのカテキズムより明確にプロテスタンティズムの成熟が見られる。

この本には「すべての学校で本書を使って教えるべし」とのエドワードのイングランドとアイルランドのグラマースクールの教師にあてた命令書が掲載されており（A4^v-A5^v）、ラテン語版、英語版とは異なり、フローリオのダドリー宛の献呈文や（A2^r-A3^r）、王の臨終の祈り（E7^v-E8^r）、そして臨終に立ち会った人々の署名まで印刷されている（E8^r）。いわば国家のお墨付きの書物だったのだ。王の存命中に印刷が進められたものの、まさに時代の変り目出版された。このような国家的要素の強い重要な著作が、英国からイタリアへ向けて発信されたのだ。さらに、このイタリア語版は42箇条を削除したことが幸いしたためか、メアリー時代での焼却を免れ、結果的に当時の英国におけるプロテスタンティズムの有りようを今に伝える、歴史的にも貴重な資料となった。エリザベス時代にアレクサンダー・ノーウェルがカテキズムを編纂した際には、フローリオ訳がそのもととなったと伝えられている（STC 18701）。

この本を印刷したスティーヴン・ミールドマン（fl. 1536-1559）はアントワープから亡命してきた、エドワード時代で第3位の印刷数を誇る大物印刷業者である。3版のイタリア本を印刷し⁽⁴⁸⁾、同時代の出版の解明には不可欠な人材だ。その活動は、この時代の英国における印刷業者の特徴を体現しており、時代を映す鏡としての分析が有効である。代表的な著者や、大物印刷業者との関係を構築し、イタリアへの傾斜をいち早く先取りした、極めて興味あるプリンターである。

本書の翻訳をしたイタリア人ミケランジェロ・フローリオ（1515-1572?）はエリザベス時代にイタリアの文化を届けた偉大な貢献者ジョン・フローリオの父である。1550年来英し、克蘭マー、セシル、オーキーノ、そしてヴェルミーリの保護を受ける。息子の偉大な業績の陰に隠れがちだが、息子の教育に心を砕き、言語学者及びイタリア文化の紹介者としての息子の活躍を可能にした。外国人教会のイタリア教会牧師も務める。フローリオの評価が高かった証拠だ。本書の外に、未出版も含めると著書3版を著し、翻訳書1版を出版している⁽⁴⁹⁾。

ミールドマンとフローリオには幾つかの共通点がある。まずふたりとも熱烈なプロテスタントであった。ミールドマンは親方マテウス・クロムの工房に来た時から、プロテ

スタンティズムに対して明確な考えを持っていた。フランシスコ派の修道士だったフローリオは1540年代初めにプロテスタントに改宗し、投獄や死刑の判決まで受けるが、脱獄して大陸を放浪し、信仰を貫いた。またふたりとも亡命者であり、ミールドマンは1546年6月のカール五世の勅令によりアントワープから、フローリオは大陸放浪の後、当局の手を逃れてロンドンにやってきた。そしてふたりとも外国人教会に深く関わっていたのである。さらにミールドマンもフローリオと同じく翻訳を試み、強烈な教皇攻撃の書『ローマカトリック教会の崩壊』を英語からオランダ語に訳した(STC 21307.3, 21307.5)。また共訳で旧約と新約聖書をオランダ語に翻訳している(USTC 408030)。メアリー治世になってふたりは英国を後にし、ミールドマンはエムデンへ、フローリオはストラスブールへと旅立った。

1550年に設立の勅許がおりた外国人教会は、低地諸国やフランスなどから来英した人々を中心とした教会である。国内で唯一、英国国教会のルールに従わなくてよいとされ、プロテスタント振興の中心だった。当時のロンドンの人口については諸説あるが⁽⁵⁰⁾、5万～6万人と考えられる。時代初めには5,000～6,000人とされていた外国人も、1553年の時点では、ペティグリーによると、少なくとも1万人はいた⁽⁵¹⁾。外国人が人口の1/5という割合は、国が無視できない大きさだ⁽⁵²⁾。そのうちイタリア人がどれくらいいたか、正確な数は不明だが、勅許のおかげで外国人教会は栄え、オランダ教会とフランス教会の会員数は合わせて3,000～4,000人にも達していた⁽⁵³⁾。イタリア教会にも相当数の会員がいたことが窺える。さらにロンドンには外国人教会に属さないイタリア人も多くいたことを考えると、フローリオがロンドン在住のイタリア人のために、ポーネットの教理問答のイタリア語翻訳を依頼されても当然だ。

フローリオが翻訳を思いついたもう一つの理由として、ロンドンにおけるプロテスタント教会のあり方が、既に大陸にも発信できるほど成熟していたことが挙げられる。外国人教会、中でもオランダ教会は大きな盛り上がりを見せ、最高責任者ラスコーの著作を次々とオランダ語⁽⁵⁴⁾・イタリア語(STC 16576)・フランス語(STC 16573)に訳し、大陸へ発信していた。ラスコーの大きな影響力と一連の翻訳を見て、フローリオが自分もイタリア人に、ポーネットの完成度の高い教理問答を届けたいと願ったとしても不思議ではない。外国語の印刷経験が豊かなミールドマンにとっては、イタリア語印刷のハードルは高くなかった。クランマー、ダドリーといったイタリアと結びつきの深い有力者にも助けられて、この「発信の書」の出版が実現したと考える。

文化の意識的受容は、相手の文化を受け入れるか拒絶するかは別にして、相手の文化の存在を認めることから始まる。エリザベス時代のイタリア文化受容は分かりやすいものだった。エリザベス時代の英国は、理解の幅はあったであろうが、シェイクスピアの描くイタリアを、上流階級も庶民も楽しんでた。

俺は学芸を生み育てた都、
美しいパドヴァを一目見たいと願ってきたが、
とうとう実り豊かなロンバルディアにやってきた。
ここはまさしく偉大なイタリアの楽園だ。

ウィリアム・シェイクスピア 『じゃじゃ馬馴らし』 1.1.1-4

STC 22273, S3^v.

人々はイタリア文化のすばらしさ・先進性ととも、好ましからぬ面もよく理解して、それを積極的に取り入れ、あるいは拒絶しようとした。一般人はイタリアといえは信仰心のなさや、不正直、華美なファッション、毒薬などを連想した⁽⁵⁵⁾。以下はイタリアのネガティブな側面への言及で知られているアスカムやシェイクスピアからの引用である。

奴らはキルケーの魔法でイタリアから呼び寄せられたのだ。
イングランドの風紀を乱すためにな。

ロジャー・アスカム 『教師』, STC 832, I2^v.

毒薬がお手のもののイタリア人に、だまされて
あの方は今、大変な思いをされているのかしら。

ウィリアム・シェイクスピア 『シンペリン』 3.4.15-16

STC 22273, 3a3^v.

一方、エドワード時代の国民レベルでの受容は様相が異なる。イタリア文化に対する理解はまだ一部に限られていた。一般国民には、イタリアには美人が多いとか、快適な気候、立派な都市、学問と文化の伝統といったイタリアの魅力的なイメージや、道徳的退廃といった好ましからぬイメージは、まだ書物を通しては届いていなかったのだ。そのような状況で、フローリオの「発信の書」が存在することにはどのような意味があるのだろうか。

英国はテューダー朝を通じ、紆余曲折しながらアイデンティティーを確立していった。エドワード時代はその紆余曲折の一つの偏重だったのだ。大きくプロテスタントに傾いた時期に、英国のエネルギーはイタリア要素の無意識的受容を助けつつ、プロテスタント振興という形で国内に向けられていた。そのエネルギーが自我の目覚めと結びつき、プロテスタントを急速に成熟させた。そしてその成熟した英国の姿を外部へと発信したのがこの1冊だった。ふつつつと煮えたぎるものが英国内にあり、その高

まりをまずはロンドン在住のイタリア人に、ひいてはイタリア本土に向けて噴射したので。これは後進国英国の立派な自己主張である。その自己主張の相手が、ルネサンスの花開いたイタリアであったことが着目に値する。エドワード時代は国民レベルでは無意識的受容が大勢を占めており、一見、無意識にイタリア要素を吸収していただけたように見える。しかしフローリオの『カテキズモ』の存在は、この時代の英国がイタリアを交流の相手としてはっきり認識し、自らの意志でイタリアに接近しようとしていたことを示している。この時代の発信の書はたった1冊であり、その出版は偶然の産物だったかもしれない。しかし、英国が既にイタリアに関心を持っていた貴重な証拠である。この時代の出版を言語別に見てみると、表1のようになる。

表1 言語別 宗教書 (1547-1553)

(版)

言語	出版数	宗教書
ラテン語	91	22
多国語	31	4
フランス語	13	11
オランダ語	8	8
法律用フランス語	6	0
ウェールズ語	2	1
イタリア語	1	1
スコットランド英語	1	0

伝統的に学術書、法律書は、国内向けであってもラテン語で書かれていたので、ラテン語の書物の出版数が圧倒的に多いのは当然である。また、フランスとは歴史的に見て、長い間深い関係にあったので、それが出版数に反映されているのも頷ける。注目すべきは宗教書の出版だ。表1からこの時代における英国のプロテスタンティズムに対する自信が、他国への発信という形で表されていることが窺える。ラテン語で出版された91版の書物のうち、22版が宗教書であったことは、これらの書物が大陸でも読まれた可能性を示唆する。その次にフランス語(13版)、オランダ語(8版)と続く。これは当時の外国人教会の盛況ぶりを反映している。これらの書物もロンドン在住の外国人だけでなく、大陸へも届けられたであろう。他方、スペイン語とドイツ語の書物は、母国語による宗教書の出版はない。イタリア本はたった1冊ではあるが、この1冊から英国がすでにイタリアに関心を持ち始めていたことが分かる点が重要な点だ。

5. ま と め

エリザベス時代におけるイタリアの積極的受容が英文学に大きな影響を与えたのは間違いない。エリザベス時代の人々は、イタリア文化をよく知った上で時代に花開いた文学や戯曲を楽しんでいた。今回エリザベス以前の時代、具体的にはエドワード時代の6年間半において、イタリア本が国内で28版も出版されていたことを明らかにした。これは新事実である。今まで考えられていた以上にイタリアの影響はあったのだ。その影響の様相の最大の特徴は、プロテスタンティズムとの強い結びつきである。エリザベス時代以前に中流階級において無意識的受容があったことは、エドワード時代がイタリアの文化に対して無関係ではなかったことの証明である。これは後のエリザベス時代における、より明確な意識的受容の下地になった。一方で、今回のテーマである着目すべき1冊は、これらの受容とは異なる意識的発信なのだ。

影響にはいろいろな形がある。顕著な例は、他国の文化を取り入れ、自国の文化に反映することだ。エリザベス時代に見られるような演劇や文学にイタリアの要素が反映されている例である。これらのイタリア要素を吸収した作品は、英国国民の精神に深い影響を与えた。また、上述のアスカムのように拒否・反発という形で表れ、それが文章や作品に反映されたこともある。これもまた、英国国民の精神に影響を与えたという意味で、イタリア文化の影響と言える。

それでは、この1冊の存在の何が重要なのだろうか。英国で成熟したプロテスタンティズムにとってはカテキズム自体が重要であるが、イタリアの影響を考えるにあたっては、内容がカテキズムであることが重要なのではない。重要なのは発信が、英国によるイタリアへの「文化的接近」であった点である。

フローリオの『カテキズモ』は後進国英国側から「イタリアへ伝える」という明確な意志を持ってなされた時代特有の出版だった。国内で成熟したプロテスタンティズムのエネルギーが「発信」という形で表出したのだ。つまりイタリアを文化交流の相手として見る意識が存在していたのである⁽⁵⁶⁾。その背景には、今まで述べた通り、当時の英国におけるプロテスタント振興があり、その成果として英国のプロテスタンティズムが、エドワード時代に発信のレベルにまで成熟していたことに起因する。エドワード時代の国民レベルでのイタリアの影響は、受容においても、発信においてもほぼプロテスタント一色だった。プロテスタントのムーブメントがあったからこそ、イタリアの受容も発信もあり得たのである。政府が印刷物というメディアを駆使したことが、このような大きな社会的・宗教的・文化的な変化をもたらしたのだ。

エドワード治世における、急激なプロテスタント信仰への傾倒に対して、庶民の多く

が不安を抱き、メアリーの反動政策をむしろ歓迎したという説もある。しかし、歴史の流れに逆らって、ヘンリー八世より前の国際主義的、親教皇的なカトリシズムに戻ろうとしたメアリーの政策は、失敗であったと言わざるを得ない。プロテスタントのムーブメントは宗教思想だけでなく、時代の進行に伴い国民の自意識、また有産階級にとっては獲得した修道院領の分けまへの確保というような、様々な状況の変化をももたらしていた。そのようなムーブメントの中で、エドワード時代におけるイタリアの受容と発信ははぐくまれたのである。

英国民の幅広い層に広まったイタリア文化への目覚めは、エリザベス時代におけるイタリアかぶれが突如として興ったものではないことを示している。エドワード時代の「文化的接近という行動」が次の時代にどう作用するのだろうか。この時代は書物の庶民化と海外文化への目覚めの時期であった。この特色がどのように変化してエリザベス時代の熱狂的イタリア受容に発展したかを明らかにするためには、エドワードの次に来るメアリー時代、およびエリザベス時代初期におけるイタリア文化に対するスタンスの変化を探らねばならない。

《注》

- * 本論は第59回シェイクスピア学会（2021年10月9日）における発表に基づき、発展させたものである。本論の引用の日本語訳は全て拙訳である。また本論では読み易くするために、連続3版以上のSTC番号等は注に記載した。
- (1) STC: *A Short-Title Catalogue of Books Printed in England, Scotland, and Ireland and of English Books Printed Abroad 1475-1640*, comp. by A. W. Pollard and G. R. Redgrave, 2nd edn, rev. and enlarged by W. A. Jackson and F. S. Ferguson, completed by Katherine F. Panzer, 3 vols (London: Bibliographical Society, 1986). ESTC: *English Short Title Catalogue*. The British Library. <<http://estc.bl.uk>>. USTC: *Universal Short Title Catalogue*, comp. by Andrew Pettegree and others, <<https://www.ustc.ac.uk>>.
- (2) 出版年のはっきりしない書物は沢山ある。本論文ではSTC, ESTC, RCC, USTC及び一般に認められている推定年を照合の上、採用した。エドワード六世時代と前後の時代の境である1547年と1553年については、判別できる書物は各時代にて集計しているが、不明なものについてはエドワード時代の出版として集計した。メアリー一世時代とエリザベス一世時代の境については、エリザベスの即位が1558年11月17日であることから、便宜上1558年出版についてはメアリー一世時代、1559年以降をエリザベス一世時代として集計している。RCC: *Renaissance Cultural Crossroads*, created by the University of Warwick. <dhi.ac.uk>.
- (3) John Miller, *Early Modern Britain 1450-1750* (Cambridge: Cambridge University Press, 2017), p. 144.
- (4) Louis B. Wright, *Middle-Class Culture in Elizabethan England* (New York: Octagon, 1980), p. 3.
- (5) R. H. Tawney, 'The Rise of Gentry', *Economic History Review*, 11 (1941), 1-38 (p. 1).
- (6) この3地域では、1550年頃、特に商人の識字率の向上が顕著である。David Cressy,

- Literacy and the Social Order: Reading and Writing in Tudor and Stuart England* (Cambridge: Cambridge University Press, 1980), pp. 162-63.
- (7) Louis B. Wright, *Middle-Class Culture in Elizabethan England* (New York: Octagon, 1980), p. 47.
- (8) 食料雑貨商ウィリアム・セヴノークスは1432年に商人として初めてロンドンに学校を設立。同じく織物商ジョン・アボットや金細工師パーソロミュー・リードも学校を設立している。Wright, *ibid.*, p. 45.
- (9) クリストファー・マーロウの父は靴屋, アントニー・マンデイの父は呉服屋, ジョン・ウェブスターの父は仕立て屋, ウィリアム・シェイクスピアの父は皮手袋商人だった。
- (10) 1543年5月12日に英国議会で成立した法律で聖書を読むことが許されたのは、聖職者、貴族、ジェントリ、裕福な商人、そして身分の高い女性のみだった。この制限はエドワード治世になるまで続く。
- (11) Anna E. C. Simoni, 'Dutch Printing in London', in *Foreign-Language Printing in London 1500-1900*, ed. by Barry Taylor (Boston Spa and London: British Library, 2002), pp. 51-69 (p. 51).
- (12) Andrew Pettegree, *Foreign Protestant Communities in Sixteenth-Century London* (Oxford: Clarendon, 1986), p. 78.
- (13) John Guy, *Tudor England* (Oxford: Oxford University Press, 1990), p. 204.
- (14) ホーガースの *An Answer to the Ballade, Called the Abuse of ye Blessed Sacram[e]t* はロバート・クローリーが全文を引用して反駁している (STC 6082)。
- (15) STC 5100, 5071, 5072, 5073, 5074.
- (16) STC 5225.5, 5241, 5246, 5252, 5258.
- (17) STC 19906, 19907, 19907a.
- (18) Martin Lowry, *The World of Aldus Manutius* (Oxford: Blackwell, 1979), p. 147.
- (19) G. B. Parks, 'The Genesis of Tudor Interest in Italian', *PMLA*, 77 (1962), 529-35.
- (20) 資料1参照。
- (21) 資料1, Nos 6, 11.
- (22) エリザベス時代のイタリア本の出版数およびその詳細については以下を参照されたい。
Soko Tomita, *A Bibliographical Catalogue of Italian Books Printed in England 1558-1603* (Farnham: Ashgate, 2009) 及び Soko and Masahiko Tomita, *A Bibliographical Catalogue of Italian Books Printed in England 1603-1642* (Farnham: Ashgate, 2014), pp. 337-412.
- (23) 人文主義者で、エドワード六世の教育を担当した。
- (24) オーキーノの説教集: STC 18764, 18765, 18766, 18767; 『ローマ司教の不当な篡奪の悲劇又は対話』(STC 18770, 18771)。資料1, Nos 3, 4, 21, 22, 7, 8.
- (25) 1549年オックスフォード大学総長リチャード・コックスの司会で、化体説を擁護する3名のカトリックの神学者ウィリアム・トレシャム, ウィリアム・チェドシー, モーガン・フィリップスと討論した。
- (26) イタリア本の宗教書の著者については資料1参照。
- (27) イタリア本の宗教書の翻訳者については資料1参照。
- (28) この時代で最多の印刷数208版を誇るグラフトンは81冊の宗教書を出版し、シアーズとの共同印刷を含めて123版を印刷したデイは107版, 86版を印刷したN. ヒルは60版, またミールドマンも87版の印刷物のうち68版までが宗教書であった。彼らは皆イタリア本を印刷している。
- (29) STC 24721, 24725, 24725.3。資料1, Nos. 19, 20, 26。原典: *Practica in chirurgia. Copiosa*

- in arte chirurgica nuper edita* (Rome: Guillery and Nani, 1514) と *Pratica in professione chirurgica. Compendiosa muncupata nouissime compillate* (Rome: Mazochim, 1517).
- (30) イタリア本でフォリオの医学関係書にはターナーの『新本草書』がある (STC 24365)。
- (31) 資料 1, No. 2.
- (32) *Summa de Arithmetica Geometria Proportioni et Proportionalita* (Venice: Paganini, 1494).
- (33) 資料 1, No. 24.
- (34) ISTC はベトラルカを 93 版, ダンテを 31 版, ボッカチオを 81 版掲載している。ISTC: *Incunabula Short Title Catalogue* (London: British Library, 2016)。ペティグリーによれば, ベンボーが「俗語論」(1525) で, 文体の模範としてベトラルカとボッカチオを賞賛したため, 16 世紀に両作家の著作集がイタリアで洪水のように出版され, 相対的にダンテの地位が低くなった。Andrew Pettegree, *The Book in the Renaissance* (New Haven and London: Yale University Press, 2010), p. 158.
- (35) ピウス二世の *De curialium miseria* (Rome: Plannick, c. 1490) の意訳。資料 1, No. 5.
- (36) 資料 1, No. 28.
- (37) 資料 1, No. 11.
- (38) STC 5409, 6832.23, 24020, 4813。資料 1, Nos. 1, 13, 16, 27.
- (39) イタリア語の書物はヘンリー八世の最後の 7 年間では 0 版, メアリー時代では 2 版, エリザベスの最初の 7 年間では 1 版のみの出版だった。
- (40) Denis B. Woodfield, *Surreptitious Printing in England 1550-1640* (New York: Bibliographical Society of America, 1973), p. 80.
- (41) Paul F. Grendler, *The Roman Inquisition and the Venetian Press, 1540-1605* (Princeton, NJ: Princeton University Press, 1977), p. 82.
- (42) この書物の書誌学的記述については, 資料 2 参照。
- (43) 英国の宗教改革は国王の権威への服従だったとして, 「上からの改革」を強調する修正主義の立場の研究は, 教区レベルでの実態を示す教区巡察記録や遺言書, 教区委員記録などを重視し, プロテスタントイズムは一般民衆には浸透しなかったと主張する。Christopher Haigh, *English Reformations: Religion, Politics and Society under the Tudors* (Oxford: Clarendon, 1993), pp. 12-21. *The English Reformation Revised*, ed. by Christopher Haigh (Cambridge: Cambridge University Press, 1987), pp. 19-33。一般民衆への浸透具合をどう評価するかは, 後のメアリーやエリザベス時代のプロテスタントイズムの評価と合わせて考えなくてはならない。しかし, 上述のエドワード時代における宗教書の大量出版を「上からの改革」のみで説明し, 国民が服従してこれらの書物を購入したとするには無理があると考えられる。
- (44) 信仰によってのみ義とされるとし, 洗礼と聖餐以外の聖典礼を廃した。また化体説を否認し, 英国を新教国として確定した。
- (45) *Deutsch Catechismus Mart. Luther* (Wittenberg: Rhaw, 1529)。
- (46) プロテスタントと一言で言っても, 信仰にも多くのヴァリエーションが見られ, 教区民レベルでの信仰のあり方に適した, 多くの教理問答が出版された。Michael Mullett, *Historical Dictionary of the Reformation and Counter-Reformation* (Lanham, Tronto, Plymouth: Scarecrow, 2010), p. 72.
- (47) ポーネットのほかに, 主なものとしてルター (USTC 635684), クランマー (STC 5992.5), ラスコー (STC 15260) によるカテキズムがある。
- (48) STC 4813, 11903, 22992。資料 1, Nos. 27, 25, 23.
- (49) *Apologia di Michel Agnolo Fiorentino* (Basel: Catani, 1557)。未出版のイタリア語文法

- 書 *Regole et Institutioni della Lingua Thoscana* はジェーン・グレイへの献呈本が大英図書館に所蔵されている。ジェーンの伝記: *Historia de la vita e de la morte de l'Illustriss. Signora Giovanna Graia* ([Middelburg]: Riccardo Pittore, 1607). 訳書には *Catechismo* の外にゲオルク・アグリコラの *De re metallica* (Basel: Froben, 1563) がある。
- (50) 香内三郎は 6, 7 万人と推定している。『活字文化の誕生』(東京: 晶文社, 1982), p. 54. 山田昭廣は 1569 年の段階で 64,285 人と計算している。 *Experiencing Drama in the English Renaissance: Readers and Audiences* (New York and London: Routledge, 2017), p. 4. Folgerpedia は 1550 年には 5 万人が在住していたとしている。
(<https://folgerpedia.folger.edu>).
- (51) Andrew Pettegree, *Foreign Protestant Communities in Sixteenth-Century London* (Oxford: Clarendon, 1986), p. 78. 1568 年時点でのロンドンにはオランダ人とフランス人だけで、6,342 人いた。 *Returns of Aliens Dwelling in the City and Suburbs of London from the Reign of Henry VIII to That of James I*, ed. by R. E. G. and E. F. Kirk, 4 vols (Aberdeen: Aberdeen University Press, 1900-08), III, p. 439.
- (52) 近年、英国において都市が宗教改革にどのような役割を果たし、宗教改革は都市に何をもたらしたかという問題が注目されているが、その重要性はこの在英外国人の割合からも窺える。 Patrick Collinson and John Craig, *The Reformation in the English Towns, 1500-1640* (Basingstoke: Macmillan, 1998). Robert Tittler, *The Reformation and the Towns in England: Politics and Political Culture, c. 1540-1640* (Oxford: Clarendon, 1998).
- (53) Andrew Pettegree, *Foreign Protestant Communities in Sixteenth-Century London* (Oxford: Clarendon, 1986), p. 78.
- (54) STC 15260, 15260.5, 15260.7, NB 17994. NB: *Netherlandish Books*, ed. by Andrew Pettegree and Malcolm Walsby (Leiden: Brill, 2011).
- (55) Andreas Mahler, 'Italian vices: cross-cultural constructions of temptation and desire in English Renaissance drama' in *Shakespeare's Italy: Functions of Italian Locations in Renaissance Drama*, ed. by Michele Marrapodi and others (Manchester: Manchester University Press, 1993), pp. 49-68 (p. 49).
- (56) エリザベス時代全体ではイタリア語の本は 41 版出版されている。その多くは 1584 年以降に出版された。最初の 7 年間では 1 版のみ (国の外交文書のイタリア語版) であり、1584 年以前の 27 年間でも、4 版のみにとどまっている。すなわちエドワードの 6 年間半と同じ出版数でしかない。このことからエドワード時代に、時代を先取りして本書が出版された意義を見逃すべきではない。

(原稿受付 2022 年 6 月 15 日)

英国で出版されたイタリア本一覽 (1547-1553)

No.	STC	Date	King	Edition	Author/Compiler	Short Title	Translator	Printer	Publisher	Dedicattee	Place	size	Genre	Genre 2	Language
1	5409	1547	Henry /Edward	AE	Clerc, John	De mortuorum resurrectione, & extremo iudicio in quatuor linguis succincte conscriptum opusculu[m]. Ioanne Clerco	-	Herford, John	Toy, Robert	-	London	4°	RT	Resurrection & Judgment Day Protestant	L,E,I,F
2	26093.5	1547	Henry /Edward	F	Ympyn Christoffels, Jan bossed on Luca Pacioli & Jehan Paulo de Bianchi.	A notable and very excellent woroke, expressing and declaring the manner and forme how to kepe a boke of account[ment]es or reconynges.	unknown	Grafton, Richard	Grafton, Richard	unknown	London	2°	LM	Accounting	E
3	18764	1548	Edward	F	Ochino, Bernardino	Sermons of Bernardino Ochine of Sena godlye, fruitful, and very necessarye for all true Christians	Bacon, Anne Cooke, Lady	Car, Roger	Riddell, William	-	London	8°	RT	Protestant sermons	E
4	18765	1548	Edward	F	Ochino, Bernardino	Sermons of the pyght famous a[n]d excellent clerke Master Bernardino Ochine.	Argentine, Richard	Scoloker, Anthony	Scoloker, Anthony	Duke of Somerset by Richard Argentine	Ipswich	8°	RT	Protestant sermons God	E
5	1384a	1548	Edward	AE	Pius II, Pope (Enea Silvio Piccolomini)	Here begynneth the egloges of Alexander Barclay, priest.	Barelay, Alexander	Powell, Humphrey	Powell, Humphrey	-	London	4°	Lit	Court & Courtiers poetry	E
6	2726	1549	Edward	F	Arestino, Pietro; Harrington, John (ed.)	Certaine psalmes chosen out of the psalter of Dauid, called thee. VII. Penytentiall psalmes, drawen into englyshe meter by sir T. Wyat [Ed.] (J. Harrington.)	Wyatt, Thomas	Raynald, Thomas	Harrington, John	William, Marquis of Northampton by J. Harrington	London	8°	RT	Psalms Protestant	E
7	18770	1549	Edward	F	Ochino, Bernardino	A tragoeidie or dialogue of the vniuste vsurped primaacie of the Bishop of Rome,	Poynet, John	Hill, Nicholas	Lyme, Walter	Edward VI by Bernardino Ochino	London	4°	RT	Protestant attack of Bishop of Rome Reformation allegory	E
8	18771	1549	Edward	AI	Ochino, Bernardino	A tragoeidie or dialogue of the vniuste vsurped primaacie of the Bishop of Rome,	Poynet, John	Hill, Nicholas	Lyme, Walter	Edward VI by Bernardino Ochino	London	4°	RT	Protestant attack of Bishop of Rome Reformation allegory	E
9	24018	1549	Edward	F	Thomas, William	The historie of Italie, a boke exceeding profitable to be redde:	Thomas, William	Berthelet, Thomas	Berthelet, Thomas	John Dudley by William Thomas	London	4°	HP	Italian History	E
10	24673	1549	Edward	F	Vermigli, Pietro Martire	Tractato de sacramento Eucharistia, habita in celeberrima vniuersitate Oxoniensi in Anglia.	-	Wolfe, Reyner	Wolfe, Reyner	Thomas Cranmer by Vermigli	London	4°	RT	Lord's Supper	L
11	7272	1549	Edward	F	Du Castel, Christine (Christine, de Pisan)	Here foloweth the .C. hystories of Troye. Lepistre de Othea deesse de Prudence	Weyer, Robert	Wyer, Robert	Wyer, Robert	-	London	8°	Lit	Troy Romances	E
12	2985.3	1550	Edward	F	-	Christen prayers & godly meditations vpon the Epistles of saint Paule to the Romains	Becon, Thomas	Wyer, John	Wyer, John	M., T. by Becon	London	16°	RT	Romans Biblical exegesis Protestant	E
13	6832.23	1550	Edward	AE	-	Sex linguaru, Latine, Teuthonica, Gallice, Hispanice, Italice, Anglice, ditididistinus dictionarius.	unknown	Hill, Nicholas	Jugge, Richard	-	London	8°	Lan	Dictionaries L,F,S,I,E,G	L,F,S,I,E,G
14	11313	1550	Edward	F	Bartholomaeus de' Rinonichi (L. orig.); Erasmus Albertus (G. ver.)	The Alcaron of the Bare-foote Friers	-	Grafton, Richard	Grafton, Richard	-	London	8°	RT	Francis, of Assisi Protestant	E
15	12365	1550	Edward	F	Gribaldi, Matteo and John Calvin (preface)	A notable and maruailous epistle of the famous doctor, Mathewe Gribalde, professor of the law,	A. F. [As]lo[n]by, Edward]	Oswen, John	Oswen, John	-	Worcester	8°	RT	Jesus Christ; Protestant	E
16	24020	1550	Edward	F	Thomas, William	Principal rules of the Italian grammar, with a dictionarie for the better understanding of Boecae, Petrarchia, and Dante:	-	Berthelet, Thomas	Berthelet, Thomas	-	London	4°	Lan	Italian Grammar	I, E
17	24665	1550	Edward	F	Vermigli, Pietro Martire	A discourse or traicteise of Petur Martyr Vermilla Flore[n]ine... sacrament of the Lordes supper	Udall, Nicholas	Whitchurch, Edward	Udall, Nicholas	William Parr, marquess of Northumberland by Udall	London	4°	RT	Lord's Supper	E

資料 1

No.	STC	Date	King	Edition	Author/Compiler	Short Title	Translator	Printer	Publisher	Dedicatree	Place	size	Genre	Genre 2	Language
18	24666	1550	Edward	F	Vernigli, Pietro Martire	An epistle vnto the right honorable and christian prince, the Duke of Somerset written vnto him in Latin, atome after his deterruance out of trouble	Norton, Thomas	Hill, Nicholas	Lyme, Walter	Vernigli's epistle to Somerset	London	8°	RT	Somerset	E
19	24721	1550	Edward	AE	Vigo, Joannes de	The most excellent workes of chirurgery, made and set forth by maister Iohn Vigen,	Bartholomew Traheron,	Whitchurch, Edward	Whitchurch, Edward	Richard Tracy by Traheron	London	2°	LM	Medicine	E
20	24725	1550	Edward	F	Vigo, Joannes de	This lyvell practyce of Ioh[an]nes de Vigo in metecyne,	unknown	Wyer, Robert	Wyer, Robert	-	London	8°	LM	Medicine prescriptions	E
21	18766	1551	Edward	F	Ochino, Bernardino	Certaine sermons of the ryghte famous and excellent clerk master Barnardine Ochine,	Bacon, Anne Cooke, Lady Argentine, R.	Day, John	Day, John	-	London	8°	RT	Protestant sermons God Salvation Predestination	E
22	18767	1551	Edward	F	Ochino, Bernardino	Fourtene sermons of Barnardine Ochync, concerning the predestination and election of god:	Bacon, Anne Cooke, Lady	Day, John & William Seres	Day, John & William Seres	Lady Anne Fitzwilliam [Anne's mother]	London	8°	RT	Protestant sermons Predestination	E
23	22992	1551	Edward	F	Spagnuoli, Baptista [Mantuanus]	A lamentable complayme of Baptista Ma[n]uanus,	Bale, John	Mierdman, Steven	Day, John	Griffine Tyndale by John Bale	London	8°	RT	Death not to be feared Protestant	E
24	24657	1551	Edward	AE	Vergilius, Polydorus (Vergil, Polydore)	An abridgement of the notable worke of Polidore Vergile concerninge the deuises and first finders out aswell of artes....	Langley, Thomas	Grafton, Richard	Grafton, Richard	Sir Antony Demy by Langley	London	8°	LM	History of Invention	E
25	11903	1552	Edward	F	Dalla Rovere, Giulio	Of the Christian Sabbath a godlye treatise of Mayster Iulius of Milayne, translated out of Italian	Langley, Thomas	Mierdman, Steven	Riddell, William	William Lewis of London by Langley	London	8°	RT	Sabbath	E
26	24725.3	1552	Edward	AE	Vigo, Joannes de	This lyvell practyce of Ioh[an]nes de Vigo in metecyne	unknown	Wyer, Robert	Wyer, Robert	-	London	8°	LM	Medicine prescriptions	E
27	4813	1553	Edward	AT	Poynet, John	Cathechismo, cioe forma breue per amaestrare i fanciulli: la quale di tutta la Christiana disciplina	Florio, Michelangelo	Mierdman, Steven	Mierdman, Steven	Dudley, John by Florio, Michelangelo	London	8°	RT	Catechism Protestant	I
28	19970	1553 /Mary	Edward	AE	Pius II, Pope (Enea Silvio Piccolomini)	The goodli history of the moste noble and beautifull ladye Lucrece of Scene in Tuskanie	unknown	Day, John	Day, John	-	London	4°	Lit	Eurrius & Lueres Prose	E

【略語】

版	F	初版
	AE	別版
	AI	別刷
	AT	別訳

ジャンル	HP	歴史・政治
	Lan	言語
	Lit	文学
	LM	学術・マニユアル
	RT	宗教

言語	E	英語
	F	フランス語
	G	ドイツ語
	I	イタリア語
	L	ラテン語
	S	スペイン語

【本論文におけるイタリア本の定義】

英国で出版された書物で、執筆から出版までの過程で、イタリアの要素が含まれている書物

「イタリア本」に含まれるのは

1. イタリア語で書かれ、英語に翻訳された書物 例 STC 18765
2. イタリア語で書かれ、英国で出版された書物 例 STC 6832.23
3. イタリア人によってラテン語で書かれ、英国で出版された書物 例 STC 24673
4. イタリア語に翻訳され、英国で出版された書物 例 STC 5409

『カテキズモ』の書誌学的記述

A translation

1553

STC 4813

L: C.37.a.3.

[S. Mierdman]

L: the British Library

I. Transcription

☛ CATHEꝰ | CHISMO, CIOE FORꝰ | *ma breue per amaestrare i fanciulꝰ | li: La quale di tutta la Christiana disciplina cõꝰ | tiene la fomma: E per l'autorita del Serenissimo | Re d'Inghilterra. &c. meffa in luce: e con or ꝰ | dine che tutti i maestri di scuola à difceꝰ | poli loro l'infegnino: e in quella | con diligenza amaestrino.*

¶*Tradotta di Latino in lingua | Thofcana per .M. Michelagnolo | Florio Fiorentino.* |
[title page vignette]

English translation:

A catechism in brief form to instruct children. Which contains the total of all Christian teaching. And by the authority of the most serene king of England is published; and in order that all schoolmasters might teach it to their pupils and in which they might instruct them with diligence.

Translated from Latin into the Tuscan language by .M. Michelangelo Florio Fiorentino.

No colophon.

II. Collation

8°: A-E⁸ F⁴, 44 leaves unnumbered; [S5 signed (-A3, 4, D2)]

III. Contents

A1^r: TP; A1^v: blank; A2^r–A3^r: dedicatory epistle to 'Il' Signore Giouanni, Dudele degnissimo Duca di Nortamberlande [Lord John Dudley, most worthy Duke of Northumberland]' by 'Maestro Michel agnolo Florio'; A3^v–A4^r: Florio's preface to 'Al Pio e Christiano lettore [to the pious and Christian reader]'; A4^v–A5^v: injunction of King Edward VI being the head of 'la chiesa d' Inghilterra, e d' Hibernia [the Church of England, and of Ireland]', to 'tutti i maestri di scuola di gramatica che fono, e che faranno. [all the teachers of the grammar school who are, and who will be]' dated 'à Granuicci Adi .20. di Maggio. L'Anno. VII. del nostro regno. [at Greenwich the 20 May the 7th year of our reign]'; A6^r–E7^r: text headed 'Catechismo, cioe forma breue per amaestrare i fanciulli: La quale di tutta la Christiana disciplina contiene la fomma: fatta in Dialogo: Maestro, & Auditore. [Catechism, that is a brief form for the training of children: in which the whole Christian discipline is contained: done in dialogue between master and auditor.]' with 'Amen' at end; E7^v–E8^r: prayer headed 'Orazione del Serenissimo Re Edouardo festo d' Inghilterra fatta da lui il festo giorno di Luglio hanno. M.D.Liij. Della sua eta festodecimo, e del suo regno VII. tre hore innanzi che morisse, non pensando d'esserudito, con gl'ochi chiusi [Prayer of the Most Serene King Edward sixth of England given by him on the sixth day of July in M.D. Liij. Of his sixteenth age, and of his seventh reign. Three hours before he died, not thinking of being heard, with the closed eyes] followed by five signatures of those present at the deathbed of Edward VI; E8^v–F4^r: prayers headed 'Preghiere di M.M.F.F. Vtilissime ad ognuno' [Prayers of M.M.F.F. Very Useful to everyone] containing eight orations including 'Benedizione della tauola' [Blessing of the table] and 'Ringratiamento' [Thanksgiving]; F4^v: blank.